

添付資料（10）

チームリーダー活動報告書

大上正裕
樋口昌孝
江口圭介
川村雅文
石原雅行
福島裕行
上田敏彦
秋山芳伸
和田徳昭

慶應義塾大学医療チーム・第1班報告書

外科・大上正裕

・2月1日、チーム団長・相川直樹教授ならびに第1班団員6名（Doctor:大上正裕（外科）、樋口昌孝（小児科）、三好俊一郎（内科）、Nurse:石井孝子（1-4）、長岡艶子（4N）、樽田郁子（10S））が神戸市東灘区に到着。東灘保健所にて石井昌生所長、石原京助先生（神戸市民中央病院呼吸器内科より東灘区に派遣され、現在東灘区の医療行政を統括されている）、本田守二保健課長に挨拶。2月中、住吉中学校、御影北小学校の両避難所内の仮設診療所（24時間対応型）の維持を依頼される。

・住吉中学校避難所：当初約2000人の避難者がいたが、現在は約630人。また、夜間人口に比して昼間はかなりの人が働きに出たり、家のかたづけなどに出ており人口が減少している。現在、学校の授業は卒業を控えた3年生のみ行なわれている。学校の保健室を仮設診療所として使っており、さらに会議室を1室いただいております、夜間はこの2室に男女わかれて宿泊した。校長先生以下職員の先生方は1月20日より慶應グループで維持しているせいか、極めて好意的で何でも協力して下さる。

・御影北小学校避難所：当初約1000人の避難者がいたが、現在は約400人。ここも夜間人口に比して昼間の人口は少ない。この診療所は、1月中は、いろいろな施設が短期間つつ引き継いでおり、2月1日より慶應に引き継がれた。ここも、学校の先生方は良く協力して下さり、診療室は保健室を使用している。この、診療室には寝たきりの老人が2人寝泊りしており、この人たちは早急に施設に転送する予定。

・1月中は各避難所内診療所の受診は、風邪や不眠、便秘などが主ではあるが1日100人～200人と多かったが、十分に薬が行き渡ったためか、2月に入り1日30人～50人程度に落ち着いてきた。今の所、医療展開が早かったのが功を奏したためか当初危惧していたインフルエンザの蔓延は見られていない。ただし、特に老人を対象にしたインフルエンザのワクチン接種が開始され、今後各避難所においても接種ができるように検討されている。

・医療ニーズとしては、2月に入り、全国から慶應のような施設としての救援が増え、阪神間の各地区ともかなり避難所内診療所の医療チームは充足してきている。かつ、2月1日現在、東灘区の医師会の集計として全体の診療所の内、75%にあたる155施設が既に細々ではあるが、診療業務を再開したとの報告があった。このため、当初、最も心配されていた慢性疾患患者の継続薬が何とか途絶しないで投薬されそうな見通しであることがわかり、明るい方向への見込み違いに一同ほっとしているところである。ただ、石原先生いわく、各避難所内の仮設診療所は、避難者にとって医療関係者が自分たちと寝泊りを共にしてくれているという無形の安心感を与えており、現在の厳しい避難所生活の状況下では、このファクターが非常に重要であり、当分の間、縮小する考えはないとのことである。ただし、2月の下旬頃には今後の戦略を再検討するつもりだと言われている。

・実際の診療は、ほとんど内科のプライマリーケアが主体で、外科的な処置もほとんどなく、小児科の需要も思ったほどなかった。ただし、卒後3～4年以降のドクターであれば何科の者であれ十分対応可能である。特に、ニーズは夕方から夜にかけて多くなり、夕方の5時頃から9時ぐらいまで診察にくる方たちが多かった。

・医療チームの生活は、住吉中学校に男女2名ずつ、御影北小学校に1名ずつ2室にわかれて寝泊りした。就寝時は、暖房（石油ストーブ）を消して寝たが、寝袋によりまずまず暖はとれた。ただし、やはり寒かった。今回、購入した石油ファンヒーター、電子レンジ、テレビ等は非常に役にたっている。食事は、十分に配給のもので事足りており、炊き出しも頻回に行なわれており心配ない。また、大きなスーパーも再開しており、驚くべきことに十分生鮮食料品も並んでいた。

2月1日、阪神電車で梅田駅を出発し、大阪から尼崎、芦屋、神戸に入るにつれ家屋の倒壊、ビルの傾きが目についていった。終点の青木駅周辺は惨たんたる風景が並んでいたが、人々はあまりまわりの風景を気にせず通行している状態であった。

今回の医療業務の中心は住吉中学校、御影北小学校の避難民および近隣の住民を対象としたものである。震災後2週間たち人々の顔色に少し生氣が見え始めた状態からのスタートであった。業務内容は感冒や筋肉痛、傷の処置が中心で、以前必要とされた各地区の巡回診療については2月以降各医療施設からの派遣によりむしろ人余り状態で不必要であった。今後は東灘保健所の指導のもと一応2月いっぱいをめどに動いていくが、地元の医療施設の再開はめざましく地元の復興を妨げない医療が必要と思われた。

報 告 書

肺 外 科 研 究 室

江 口 圭 介

私は、兵庫県南部地震の被災地に対する医療援助活動における外科学教室からの派遣員として平成7年2月8日から2月10日までを担当した。地震から約3週間ほど経過していたため、駐在していた住吉中学校および御影小学校の避難所では、すでに外科的な治療を必要とする状況はほとんどなかった。予想外に物資は豊富であったが、避難所の冷え込みが厳しかった。感冒症状を訴える被災者が多く、集団生活で迷惑をかけることを懸念してか、鎮咳薬の希望が圧倒的に多かった。

報 告 書

外科学教室呼吸器外科

川村 雅文

阪神大震災の被災地に対する慶應義塾よりの派遣医師として、平成 7年 2月10日より 2月13日まで神戸市東灘区の住吉中学校および御影北小学校の避難所を担当した。

直前にJR東海道線が住吉駅まで開通したため、避難所までは徒歩10分であった。避難所には食料は豊富であったが、内容に変化が乏しく、また冷え切った食料であるため、避難生活者の評判は悪く、無駄に破棄されているものが目立った。更に交通の回復に伴い商店には通常と変わらない生鮮食料品が大量に販売されており、避難所生活とのギャップが目についた。

倒壊家屋の撤去作業が至る所で行われていて、市内は霞がかかったように煙に包まれていた。この煙には大量のアスベストが含まれおり、将来肺癌、悪性胸膜中皮腫の発生率の増加が懸念される。

診療所の受診者数は減少傾向にあり、開設時と比べ既に6-7割になっていた。疾患の構造も外傷、熱傷等は少なく、ほとんどが感冒で、特に咳嗽を主訴とするものが多く、暖房設備の欠如と、多量の粉塵の吸入がその背景にあるものと推察された。その他目立ったこととして、連日のように反復して受診する患者がいること、薬その他医療材料だけを目的に入室してくる被災者の多いことなどが挙げられる。これらはいずれも避難所の診察室ならでのことであろうが、底流に様々な問題を含んだ事象と思われ、今後それらが顕在化してくることが懸念された。

既に一部の医療チームの引き上げが検討され始めており、慶應義塾に対し、自治医大から引き上げ後の担当避難所に対する巡回診療
チーム

の要請があった。東灘保健所もその方向で引き継がれることを希望したため、相川本部長の御了解の下、自治医大医療チームと具体的な引き継ぎのスケジュールの検討に入った。

2か所の避難所を担当したが、避難所によって管理者（学校）側の被災者に対する対応に違いの大きいことが感じられた。これは主として、その管理責任者の考え方によるところが大きいようであった。この点は十分注意して行動しなければならないと思われた。

定点で長期に医療施設を開設していることの意義の大きさを感じた。活動拠点を持たない種々のボランティア（眼科、耳鼻科、歯科などの医師や、心理療法士など）に活動の場を提供できたばかりでなく、医療に関連した様々な行為の提供に関する情報のコントロールにも若干の役割を果たしたように思う。

以上、現地での雑感を含めて思い付くままに列記致しました。

提出が大変遅くなり申し訳ありません。

平成 7年 3月 3日

阪神大震災派遣医療報告書

脳神経外科 石原雅行

平成7年2月13日～15日派遣チームリーダーとして神戸に行って参りましたので簡単に報告いたします。

震災からほぼ1ヶ月たった神戸の町では、倒壊を免れた各店舗が営業を行っていて多くの病院も診療を再開し、また倒壊した建物の処理が始まり復興の活気が強く感じられました。またJRも住吉駅まで再開通し、本拠地住吉中学校へのアプローチも新大阪より約40分と近くなりました。我々の担当の住吉中学校、御影北小学校は神戸市東灘区の山の手に位置し、周囲の被害は比較的少ない場所でしたが、それでも下町部からの避難民流入などもあり、それぞれ500名、250名の避難民が存在しました。とはいっても昼間は、仕事や復興作業に外出している人々がほとんどで、残っているのは病人と老人がほとんどでした。

診療内容ですが一日20数名ぐらい来所し、昼間は感冒等の内科的な患者が多く、夜間は昼間の作業でけがをした方の処置などがありました。重傷者に臨むことはありませんでした。これは、地元の病院が診療を再開してきているためと思われました。ただ震災時の粗雑な一次治療もしくは放置による創傷治癒の遅れが未だに後を引いている方や、また震災前からの精神科疾患等のコントロール不良のため集団生活にとけ込めず不眠を訴えるかた、治療施設が倒壊し高血圧、糖尿病を放置し、疾患が悪化する方も多いと思われ、医療需要に地元病院のみでは応じ切れておらず、生活力のない老人や持病持ちの方が医療の対象よりあふれているという印象を受けました（避難民の中でも高血圧や糖尿病程度の持病で病院を受診する必要はないと考える方が多い）。市中一般病院の営業状況は、震災前東灘区に136カ所あった診療施設のうち88カ所が診療再開していましたが、整形外科の手術待ち患者が非常に多いのと精神科医が足りないとのことが問題になっているとのことでした。

医薬品等は、保健所より市販薬（風邪薬等）、一般薬の供給があり、不足を感ずることはありませんでした。外科処置用の器具が少ない気もしましたが市内の病院も治療を開始しているため特に必要とは感じませんでした。

食料は、三食の配給（基本的に朝食パン、その他握り飯）のほかか地元ボランティアの方々の炊き出しもあり量的には不足は感じませんでした。すでに電気は通電し飲料にはなりません。水道が開通し水洗トイレ等がつかえ、飲料水も自衛隊の方々が日に3回給水車で巡回していますので不足ありませんでした（2月15日より水道

水が飲料可能となりました)。ガスの開通は、まだ未定でした。私が到着した2月15日に甲南小学校と阿弥陀寺に本拠をとする自治医大医療派遣チームが避難民が減少したために撤退しました。東灘保健所の依頼でこれらの避難所を慶應大学医療チームが毎日午後1時間程度の巡回診療をすることになりました。

2月14日に医療チームリーダー会議が東灘保健所であり出席いたしました。別紙現状報告と2月中に医療体制を現地病院へ移行していきたいとの話がありました。各派遣医療チームの意見もまちまちで避難所全住民に対し検診を行い隠れた病人をあぶりだしたいという積極論から引き上げの具体的な方法までいろいろ議論が交わされました。私の個人の意見としては、これからの課題は、診療を再開する地元病院への患者の引継方法、避難所が徐々に閉鎖されていくとともに撤退する医療チームの撤退方法(医療チーム派遣の重要性もさることながら時期を逃さない撤退もまた地元のためと思われた)、いつまでも避難所から自立することのできない生活力のない一人暮らしの老人や病人などの対処であると重要と思われました。

以上。

阪神大震災慶応大学医療チーム業務報告

期間：2月15日—2月21日

業務内容：

1.住吉中学校、御影北小学校各避難所における診療

住吉中学校には約450名、御影北小学校には約210名の被災者がおられた。診療所（保健室）を受診された患者は住吉、御影共に一日20から30名であった。この人数はカルテをおこした人数であり、軽微な症状に対して市販薬を投与したのみの患者は含まれていない。器質的疾患としてはインフルエンザ、気管支炎、胃腸炎、腰痛、捻挫、小切創、打撲等が主な診療の対象であった。加えて脳内出血1名、心不全と呼吸困難1名を搬送した。また、精神的衰弱が目立ってきており、心理カウンセリングを可能な限り行った。心理カウンセリングに関しては長野県カウンセラー協会の三浦様、西牧様にご協力いただいた。更に、慶応大学精神神経科の浅井教授、西岡先生、大川先生、同眼科の小野先生に診療を行っていただいた。

保健室での診療に加えて、避難所の各部屋を毎日巡回しより多くの被災者の方々と接することを心がけた。病気に関する相談はもとより、被災時の様子や世間話をうかがうことにより医師と患者という関係にとらわれず、広く人間としてコミュニケーションを行うことを目指した。

2.巡回診療

甲南小学校、阿弥陀寺の巡回診療を行った。甲南小学校の体育館に約20名の方が避難されており、他の避難所に移動された2月19日まで巡回を行った。阿弥陀寺には未だ60名前後の被災者が生活されており、期間中毎日巡回を行った。

避難所の現状：

1.ライフライン

電気は供給されていた。水道は住吉中学校、御影北小学校共に復旧していたが、東灘区でも相当広い地域で断水が続いていた。ガスは依然復旧の見込みが立っていなかった。

2.衛生環境

避難生活をされている教室、体育館等とはとにかく寒い。暖房機具はなく、布団は干すこともできず万年床となっていた。ややピークは過ぎた様にも思えたが、依然インフルエンザ等の感冒が流行していた。手洗い、うがいを励行していただき集団での予防に努めたが、衛生環境は劣悪と言わざるを得なかった。

3.栄養

避難所での食事は著しく偏っていた。朝、昼は菓子パンと牛乳あるいはジュース、夕食はおにぎりにハンバーグやコロッケが付くといった具合で生野菜や果物は支給されない。いわゆる炊き出しをときどき行ったりしているが、栄養のバランスは崩れ、ビタミンやミネラルが不足していると推測される。事実、口内炎、口角炎を高率に認め、また塩分摂取過多によると思われる高血圧が目立った。

現地の医療状況：

1. 地元の開業医、医療機関

約7-8割の開業医が診療を再開していた。また、中央市民病院等の基幹病院の受け入れ体制も整ってきていた。しかし、震災前に比べそのキャパシティーは限られており、この震災で増加した患者のニーズにすべて応えるのは到底不可能と思われた。また、我々が行っている心のケアといったものを、ご自身が震災者である先生方がなさるのは難しいように思えた。

2. 他大学、自治体の医療チーム

2月中に撤退するところが多いと思われる。詳しくは後のリーダーの方がご報告されることと思う。

今後の展望：

震災後1ヶ月が過ぎ、交通機関等のライフラインは随分復旧し、被災者の方々の生活も改善されつつあるのは事実である。しかし、避難所生活を強いられている人の数は急速に減少するとは思えず、その環境は依然劣悪である。震災を機会に寝たきりになるご老人も多く、いわゆる「避難所肺炎」に倒れる方々も多い。体の病に加えて精神的な疲労が目立っており、心のケアが是非とも必要な時期となりつつある。にもかかわらず医療チームが次々に撤退を始めている。「地元の先生方も診療を再開されたようですし、先生方の診療の妨げとなるといけませんので私たちは撤退いたします。後はおまかせします。」というのはいささか乱暴ではあるまいか、というのが現地で医療を行った者の実感です。避難所に常時診療所を開くのは困難にしても、巡回診療、カウンセリングを行うという形で援助を継続する、あるいはより広い視野に立ち衛生環境、栄養状態の改善を図るなど、今後も慶應義塾として積極的に援助を行うべきであると考えます。無論この際地元の医師や保健所、他の援助団体と足並みを揃え協力し合うことを心がけなくてはなりません。以上の考えはリーダーである私のみならず、行動を共にしたわが医療チームの総意であります。天災に引き続き人災を招くことの無いよう、慶應義塾の一人一人が自分にできることを考え直す必要に迫られていると思います。

最後に「人間と関わるということ」を再認識する機会を与えられたことに心から感謝いたします。

阪神大震災慶應大学医療チームリーダー

小児科 福島 裕之

現在の住吉中学校・御影北小学校における診療活動は、主として感冒の治療であるが、前者で一日20数人、後者で10数人である。重症患者は少ないが、心不全の患者と脳出血の患者をそれぞれ基幹病院に転送した。外科系の疾患は少ない。避難所生活が1ヶ月余りとなって、高齢者の栄養状態が悪化している印象を受けた。配給される食糧が炭水化物が中心で変化に乏しいのが原因であろう。特に介護を要するものでは、入浴が困難で衛生的な問題が生じている。巡回バスを利用するのにも保健所の介護者が必要となるため、円滑にはいかない。また各避難所の収容数が当初よりも実質的に減少しており、今後の方針として収容所の数を縮小し、医療サービスのレベルを維持する対策が望まれる。

57回 外科

上田 政彦

阪神大震災救援・慶應義塾大学医療チーム 状況報告書

平成7年2月23日～2月26日 チームリーダー 外科 秋山芳伸

2月23日現地入り PM1:00リーダー交替

JR神戸線は住吉まで開通しており東京より新幹線-神戸線と乗り継ぎ約4時間で住吉中学校到着。住吉中学校、御影北小学校ともに水道は復旧していた。

医務室受診者数約20人/日。ほとんどが感冒にて投薬。数名倒壊家屋の整理中にうけた小挫傷の処置に受診。住吉中学校避難者数500人であるが、日中は外出者が多く、医務室受診はPM6:00～8:00が多かった。東灘区の医院、病院の再開数約130あり、そちらに通院している患者もあり。しかし、情報の伝達不十分のため再開した病院、医院がどこにあるのか、どこであるのか知らない人が多かった。外の避難所の巡回は住吉駅前観音寺のみで、日中は3～4人残っているが、大きな疾患はなかった。食事配給、炊き出しは充分量あり、商店も開店しているところ多数あり。

2月24日

医務室受診者数変わらず。内容も前日同様。住吉中学校はこの日よりガス開通。済生会グループが、灘高校より撤退するため、この日より灘高校も巡回するようになった。避難者は、他の避難所同様、日中は5～6人感冒にて休んでいる人のみであった。保健所より2月28日以降の救護所内医務室開設状況、医院、病院再開状況のポスターが届き医務室前に掲示。3月1日～8日までは、救護所内医務室は12箇所にも縮小、現在診療に携わっている医療チームが担当、その後は医師会がローテーションを組んで、日中のみの診療することとなった。PM9:00より石岡氏の運転にて有間温泉へ行く。

2月25日

看護チーム交替。医務室受診者状況、巡回避難所状況変わらず。眼科、藤島先生が巡回に見えられ、4人診察、投薬及び老眼鏡処方された。感冒患者数は減少傾向にある。この日より交通規制が強化され、医療班の交通優先はなくなり、救急車両と、瓦礫の処理と再建のための車両のみ通行可能道路の範囲が拡大された。

2月26日 PM1:00リーダー交替

全体に医療状況、給食状況は改善されてきているが、住宅の不足のため、集団生活を余儀なくされ、不眠等を訴える避難者が見られるようになっている。

報告書

期間 平成7年2月26日～2月28日
(最終チーム)

チームリーダー 一般消化器外科
和田 徳昭

まず、上記期間の住吉中学校（御影北小学校）の現地情報として、約300～400名の避難民が暮らしていた。ライフラインとしての電気、ガス、水道はすべて復旧していた。食料は行政から配給されるパン、おにぎりを中心とした弁当とボランティアによる炊き出しであったが、量自体は十分で、行政配給の品は毎回同様のこともあり、余ることもしばしば認められた。被災後40日以上を経過しているため生活に不自由はまだあるものの混乱はなかった。

医療活動の場は我々の医療チームが担当したのは常設救護所の住吉中学校、御影北小学校以外に2/24から他の医療チームが撤退した後をフォローする目的で灘高校、阿弥陀寺の巡回診療を行った。内容は今迄を引き継ぎ大きな変更はない。常設救護所の診療時間は午前9時～午後8時としたが要求に応じていつでも対応した。1日の日課は午前中診療、午後1時から医師1名、看護婦1名による上記高校、寺の巡回診療、午後7時からそれぞれの小中学校の避難民のいる教室の巡回、午後8時から全員でのミーティングであった。東灘保健所発表の同地区全体の救護所患者利用状況によれば2月上旬（2/1～2/10）9660名であったものが下旬（2/21～2/26）には3025名と1/3以下に減少し、住吉中学校、御影北小学校においてもそれぞれ203名→96名、175名→56名と同様の減少傾向であった。1日の診療患者数は約10～15名で、ほとんどは風邪、腹痛などでいずれも症状は軽く投薬のみで十分対処可能であり、後方支援病院への要請を必要とするものはなかった。

2月27日午後6時より東灘保健所にて第12回（最終回）救護所の会議が開かれた。上記の如く利用患者数の減少と医療機関の9割以上再開にともない、当初32ヶ所あった救護所が2月末までに多くが撤退し3月1日からは12ヶ所となること、撤退にともなう注意事項、精神医療に関しては長期にわたり診療が必要なことなどが確認された。患者を地域へ帰すこと、cureからcareへの転換をはかることが今後必要であるとされた。

撤退するに当り住吉中学校、御影北小学校には毎日医師の巡回の必要な患者はなく、今後は保健婦による巡回となる予定である。（但し、御影北小学校には介護の必要な脳血管傷害後片麻痺のある84歳男性がいる。）

2月28日は午前より撤退作業にとりかかり、市販薬、ガーゼ、包帯等の医療品は保健室へ、処方が必要な薬剤、注射薬等は東灘保健所に引き取るように手配し、リストにある物品を慶應に宅急便にて送り午後2時には無事完了した。

最後に車の運転を初め慶應医療活動全般に渡り大変お世話になった石岡夫妻（この人抜きでは成り立たなかった!!）、住吉中学校、御影北小学校の教職員、ボランティアの方々、関西地区の多くの慶應OB,OGの方々に深く感謝いたします。

添付資料（11）・経費報告

阪神大震災救援チーム本部長

平成7年3月10日

相川直樹 殿

経理・用度課

阪神大震災救援チーム経費報告

(3月10日現在経費)

費目	金額
1. 旅費	¥3,837,650
2. 医薬品費	¥855,926
3. 医療材料	¥45,526
4. その他の物品等 (防寒衣他)	¥1,709,747
合計	¥6,449,584

期間 平成7年2月1日～2月28日

以上

阪神大震災救援用医材他 (C)
[寄贈品 医療材料費]

平成7年2月1日準備物品
No. 1

物品名	数量	備考	単価x量	合計
1, 喉頭鏡 (マッキントッシュ) (五十嵐) 志水	1本	志水寄贈 (松本氏)		5,000
ブレード 2 //	1本	"		9,600
ブレード 3 //	1本	"		9,600
ブレード 4 //	1本	"		11,000
2, 挿管チューブ 8.0(大人用)カフキ スタンダード (ポーテックス) ケビン (志水)	2本	日本メディコ寄贈 (徳本氏)	1,900x2	3,800
" 7.5(大人用)カフキ スタンダード //	2本	"	1,900x2	3,800
" 5.5(小児用)カフキ //	1本	"		900
" 5.5(小児用)カフキ スタンダード //	1本	"		1,900
" 5.0(小児用)カフキ //	1本	"		900
" 5.0(小児用)カフキ スタンダード //	1本	"		1,900
3, スタイレット 7.5 ~ 1.0mmφ 品番1000 (インターメド) ITC	2本	ITC寄贈 (張氏)	1,100x2	2,200
4, アンビューバック (ディスポ用) (AMBU) spur 松本医科 (志水)	1個	松本医科寄贈 (見辺氏)		5,800
" (ディスポ用) 小児マスク //	1個	"		5,500
5, マギール鉗子 (五十嵐) 志水	1本	志水寄贈 (松本氏)		10,000
6, バイトブロック (住友ベークライト) ユフ精器 (志水)	3個	住友ベークライト寄贈 (小無田氏)	75x3	225
7, エアウェイ 7.0 (ポーテックス) ケビン (志水)	2本	日本メディコ寄贈 (徳本氏)	1,400x2	2,800
" 6.0 //	2本	"	1,400x2	2,800
8, 自動血圧計 (テルモ) 志水	4台	テルモ寄贈 (菅井氏)	27,000x4	108,000
" 用電池 //	8個	"	1,600x8	12,800
" 用充電器 //	2個	"	2,200x2	4,400
9, 体温計 (テルモ) 志水	20本	"	2,850x20	57,000
10, 軟膏壺	1袋	テルモ寄贈 (松本氏)	42x25	1,050

平成7年2月21日朝刊

添付資料 (12) ・ 読売新聞記事

☆12版☆

(16)